ベトナム中部および南部の伝統的木造民家の架構に関する建築史的考察

A STUDY ON THE STRUCTURAL SYSTEM OF TRADITIONAL TIMBER HOUSES IN THE CENTRAL AND SOUTHERN PARTS OF VIET NAM

チャン ティ クエ ハー*, 山田 幸正**

Thi Que Ha TRAN and Yukimasa YAMADA

This paper refers to the structural system of traditional farmers' dwellings in the central and southern parts of Viet Nam from a historical point of view, being based on the surveys since 1998 in the five provinces; Thua Thien Hue, Quang Nam, Quang Ngai, Dong Nai and Tien Giang. At first, the authors discuss the original meanings of terms for structural composition and its members, and then, the architectural features of the connecting details in the part under the ridge by comparison between the center pillar type and the two pillars type. We conclude that both constructional types might derive from indigenous ways maintained from the time before Vietnamese's conquest. A center pillar has remained mainly in the southern part, and a king post has enhanced symbolic meaning in the central part of Viet Nam.

Keywords: Southeast Asia, Traditional Farmers' Dwellings, Timber Structure, Structural Terms, Center Pillar, King Post

東南アジア、民家、木構造、構造用語、中柱、束

1. はじめに

ベトナム全土に遺存する伝統的木造住宅を対象として1997年度より実施されてきた民家調査は、すでに全国十省において完了し、4,284件の事例についての記録が保存されている。また、それらの調査結果を踏まえて若干の報告や論考も出されている¹。従来、ベトナム、とくにその文化については地理的・歴史的に、中国の強い影響を受けた北部地域、チャンパ文化の中部地域、そしてクメール文化の南部地域と分けて論じられることが多く、当初、民家の建築的系統についてもおおむねそうした区分があてはまるものと信じられていた²。民家における木造架構法をはじめ、その平面構成や敷地配置においても、北部の民家は中部や南部のそれとは大きく異なっていることは、表面上の観察からも十分に理解できるところである。しかし、これまで調査された中部や南部の民家には、北部にみられた17-18世紀に遡るような事例はなく、せいぜい19世紀後半から20世紀前半に属する比較的新しい例ばかりで、民家建築の歴史的変遷を明らかにすることは容易なことではなかった。そこで本稿では、中部および南部に遺存する伝統的木造民家について、それらの建設実年代によるのではなく、中部や南部の民家架構の型式やそこに用いられている部材に対する名称について考察したうえで、斜梁の合掌部分における接手法などに着目し、それらをとくに建築技法の発展過程として整理することによって、中部および南部の民家の歴

史的な展開過程を類推しようと試みるものである。

本稿において考察対象としたのは、これまでに調査を終えた中部の三つの省、トゥティエンフエ省（以下、「フエ省」と呼ぶ）、クアンナム省、クアンガイ省と、南部の二つの省、ドンナイ省、ティエンザン省、以上合計五つの省の実例である。地元の情報にもとづいてベトナム側が中心に実施した第一次調査における対象事例は、フエ省690件、ドンナイ省401件、クアンガイ省307件、ティエンザン省350件、クアンナム省356件で、5省あわせて2,104件にも及ぶ³。そのなかから選別されて、より詳細な第二次調査が行われたのは、フエ省65件、クアンナム省35件、クアンガイ省36件、ドンナイ省25件、ティエンザン省35件であった。なお、筆者らもフエ省で59件、クアンナム省で27件、クアンガイ省で3件、ドンナイ省で22件、ティエンザン省で25件の事例については、独自に実測および聞き取りなどの調査を実施した⁴。

2. 中部と南部における架構型式とその名称

2.1 架構型式

中部から南部にかけて遺存する民家の木造骨組をみると、概して奥行方向に水平に架かる梁がほとんど使われず、屋根勾配に沿って斜めに架かる斜梁(kèo)によっておもに構成されている。それらの斜梁は柱間ごとに渡され、より下方の斜梁がそれより上の材尻に載

* 東京都市大学大学院工学研究科建築学専攻
博士課程・修士(学術)

** 東京都市大学大学院工学研究科建築学専攻
助教授・博士(工学)

Graduate Student, Tokyo Metropolitan Univ., M.A.

Assoc. Prof., Tokyo Metropolitan Univ., Dr. Eng.

るものが一般的で、こうした架構 (kèo chống) は中部から南部にかけての民家に共通してみられる特徴のひとつといえよう。ここでは、図1に示したように、大きく二つの型式にまず分けてみることにする。すなわち、架構の中央に棟木を支持する柱が立つもの (これまで「中柱型」と呼んだもの) を「型式1」とし、棟木を挟んで前後に2本の柱が立つもの (従来「束立ち型」と呼んだ中央に束の立つものと、束の立たないものがあるが、ここではそれらを区別しない) を「型式2」とする。第一次調査事例のうち調査票からでは架構が判別できない162例を除く1,799例をみると⁵、各省あわせて1,426例という大半の事例が型式2に属している。一方、型式1に属するものは373例で、南部の二つの省だけで計348例を数える。

2.2 聞き取り調査による架構名称

それぞれの調査において架構に対する名称を聞き取りし、それを各省ごとに一覧化したものが表1である⁶。vi kèo は「架構」、nhà は「家、建物」をそれぞれ表わす語彙であり、その後に続く語彙が架構型式を表わすと思われるので、以下は vi kèo nhà を省略して呼ぶ。形式1の架構に関する呼称はフエ省で ròi、クアンナム省で xuyên tâm、ドンナイ省およびティエンザン省の南部2省で nọc ngựa とそれぞれの地域で異なっている。また、型式2についても、フエ省では rường、クアンナム省では rường と đằm trính の二つの呼称が存在し、南部2省では xuyên trính と呼ばれている。ベトナム語の語意からすると、đằm とは「刺す」、xuyên とは「貫通する」という意味をもつことから、これらの đằm と xuyên はほぼ同じような意味合いで使われているものと考えられる。したがって、型式2についての呼称はフエ省とクアンナム省では rường、クアンナム省と南部2省では xuyên trính (または đằm trính) という二つの言葉に集約できる。

なお、調査から得た民家の木造架構に関するこれらの名称は、既往文献に述べられているものとほぼ一致するものであるが⁷、クアンビンからフエの中部でも北側地域でみられる民家について、Pierre Gourou は nhà rường という名称を用いている⁸。前述した聞き取り調査による名称に加えて、以下、この語彙も含めて検討したい。

3. 架構名称に用いられている語彙の意味

架構の型式などに用いられている語彙の意味について、以下に挙げる辞書・文献にもとづいて考察を進めた。文献(1): 1651年にポルトガルの宣教師 Alexandre De Rhodes によって作成されたもので、安南語をポルトガル語およびラテン語で対訳した辞書。ベトナム語がローマ字表記された最初の辞書として知られる。文献(2): 南部の語彙に関するベトナム語辞書。文献(3): 中部クアンビン・クアンチ・トゥティエンフエの方言に関する文献。文献(4): ベトナムの古語というべき喃字に関する辞書。文献(5): ベトナム語の現代国語辞典。

3.1 型式1に対する語彙 ròi, xuyên tâm, nọc ngựa

型式1の架構に対してフエ省で使われている ròi という語は、本来「照らす」という意味をもつとされ⁹、この語が建築の架構とどのように関係するのかわからない。また、クアンナム省で使われている xuyên tâm と南部2省で使われている nọc ngựa について、い

図1: 架構型式 ()内は調査番号、また図の縮尺は統一してある

表1: 架構名称

地域	省	現地の調査		
		型式1	型式2	他の呼称
北中部	TTH	 (vi kèo nhà ròi)	 (vi kèo nhà rường)	nhà ba căn hai chái
	QN	 (vi kèo nhà xuyên tâm)	 (vi kèo nhà rường)	nhà bát ván nhà tám cái nhà kèo chống
南中部	QNg		 (vi kèo nhà đằm trính)	(vi kèo nhà cặp)
	DN	 (vi kèo nhà nọc ngựa)	 (vi kèo nhà xuyên trính)	nhà chữ đinh nhà sắp dọi
南部	TG			

TTH: トウティエンフエ省, QN: クアンナム省, QNg: クアンガイ省, DN: ドンナイ省, TG: ティエンザン省

図2: 架構名称に用いられている語彙

ずれの辞書や文献でもそれらに該当する語彙の解説は見いだすことができなかった。しかし、前者を直訳すると「中心を貫通する」となることから、おそらく中心に立つ柱とその架構を表現しているものと考えられる。現時点では、ròi も nọc ngựa も、架構の形や状態に直接関わる意味をもつかどうかは不明であるが、少なくとも、これらの語彙が現代ベトナム語として一般的に使われているものではなく、おそらくは中部から南部にかけての地域で古くから土着にあった語彙である可能性が高い (図2・左)。

3.2 型式2に対する語彙 rường, rường, trính

形式2の架構に対する語彙のうち、trính とは文献(1)によれば、「家屋において奥行方向の梁」を表わすとされ¹⁰、喃字には書き直せない語であり、また現代ベトナム国語辞典にも trính という語彙はない。一方、文献(1)には掲載されていない rường という語彙は、喃字で「樑」及び「木」と「床」の字から組み合わせで表わすことができ¹¹、現代語としても「家屋の上部構造に使い、束あるいは斗を受ける小さな梁」という意味で用いられている¹²。rường と trính の二つの語彙はともに「梁」の意味を含むものと考えられるが、rường が喃字において意味をもつ漢字で表現できることから、なんらかの中国からの影響が想像され、一方、trính という語は、おそらく安南語、つまり中部・南部にあった土着の言葉に由来するものであろう。

また、*ruồng* なる語が喃字において「木+床」という漢字の組み合わせで書かれることに注目すれば、木製の「床」を含意する語である可能性が考えられる。さらにいまひとつ、Pierre Gourou が用いた *ruồng* という語彙であるが、これは文献 (1) において「屋根の近くに配される木材の板」¹³、また喃字では「箱」という漢字を含んでおり¹⁴、現代ベトナム国語辞典でも「収納するための箱」¹⁵という解説がみられる。このようなことを踏まえるならば、*ruồng*、*ruồng*、*trính* という三つの語彙には図2右側に示すような関係が考えられる。

少なくとも、安南語がポルトガル語で翻訳された17世紀中頃において、すでに「梁」を意味する *ruồng* と *trính* という語で呼ばれた架構が存在していたと考えられる。一方、*ruồng* という言葉は中国の漢字を使い、明らかに中国からの直接的な影響が考えられ、そうしたことから、おそらく19世紀初めにフエに成立した阮朝を中心にこうした呼称が広がったのではないかと想像される。また、これらの語彙とは対照的に、さきの型式1の架構が辞書や文献などではほとんど紹介されておらず、型式1の架構が、言語的に正統的でない、どちらかといえば民間に流通した語彙で呼ばれていたことは注目される。その一方で、型式2の架構は「ある正統性」をもったものと位置づけられていたと考えられる。

4. 架構型式1の建築技法的な特徴

4.1 現存事例による中部と南部との比較

第一次調査において型式1として報告された例は、フエ省で11例、クアンナム省で14例だけであった。それに対して、ドンナイ省とティエンザン省の南部2省ではそれぞれ180例と168例で、比較的に多くの事例が報告され、型式2の報告例とほぼ同じ割合となっている¹⁶。このように、型式1の架構は、中部では比較的珍しいもので、南部においては一般的に普及したものであると言えよう。また、中部で型式1の架構をもった民家が間口3間と小規模であるのに対して、南部2省でみられた型式1の架構をもった民家はすべて間口5間の家屋ばかりで、その規模は間口・奥行とも13mあまりと大きい(平均値間口13.071m×奥行12.992m)¹⁷。

構造的にみると、フエ省における型式1の事例では、2枚の板で合せ梁としたものや竹材を斜梁に用いるものがあり、これらの斜梁が柱の頂部を挟み、中柱を貫通した水平部材で前後の斜梁と繋ぐものが多くみられた(図3・左、表2・①)。同じく中部のクアンナム省の例では、斜梁を柱間1間ずつに架け渡し、水平部材は中柱と後方の斜梁とを繋いでいる(図3・中、表2・②)。一方、南部2省にみられる例では、水平部材は用いられず、斜梁は中柱およびその前後の柱の頂部でそれぞれ落とし込まれ、二間分の柱間が連結されている(348例中163例¹⁸) (図3・右、表2・③と⑤)。

斜梁の合掌部分における納まりに注目し、おもな6種の手法に整理した(表2)¹⁹。フエ省ではおもに表2の①の手法がみられた。ここでは柱が直接合掌を受けるのではなく、短い円形の横木を中柱の頂上に置き、その上に前後の斜梁を載せている。このような手法は、精巧な切り込みや仕口をもたない、竹組みなど最も初歩的な技法を映しているものと思われる。同じく中部クアンナム省の14例すべて

(1)内は当該調査地域において型式1の事例数

図3：中部と南部における型式1の特徴

表2：型式1の合掌部納まり

型式1の合掌部	①	②	③	④	⑤	⑥
TTH	8	-	-	2	-	-
QN	-	14	-	-	-	-
QNg	-	-	-	-	-	-
DN	-	-	34	-	128	-
TG	-	-	26	-	129	-
						ザン NgheAn

図4：南部民家の主屋(カミヤとシモヤを連棟する)

で、表2の②の手法がとられていた。すなわち、中柱は合掌まで到達せず、三角形をした部材(Lá quâ²⁰、「双翼」と呼ぶ)と頭貫を中柱の頂部に落とし込み、前述したフエ省での手法よりかなり強固に固められている。一方、南部2省では、中部とは異なり、表2の③および⑤の手法、なかでも⑤がほとんどであった。上述したように、南部2省で形式1の架構をもった事例はいずれも大規模であるにもかかわらず、斜梁は柱間2間分に架け渡されている場合が多い。斜梁を中柱の頂部に落とし込み、双翼を省略する場合も少なくない。

中部における型式1の架構はそれによって組み立てられる建物の規模が小さく、技法的にも精巧な造作を要しない、たとえば竹組みの手法にも通じるような、初歩的な段階を示しているのに対して、南部における型式1の架構は大規模に組まれるだけでなく、部材の省略など、技術的に進化した段階のものであることがわかる。

4.2 南部の事例にみる型式1の伝統性と変化

南部民家のひとつの特徴として、主屋が軒を接してたつ格式の異なる複数の建物から成ることが挙げられる(2棟を連棟する場合が多く、それぞれの家屋を「カミヤ」「シモヤ」²¹と呼ぶ)。南部2省において詳細な実測調査を行なうことのできた型式1の実例18例のうち、カミヤとシモヤがともに現存するものは11例あった。カミヤとシモヤの両棟において同じ架構型式が用いられているものは、上述の11例中、たったの1例しかなかった。カミヤにおいて型式1の架構が用いられていても、シモヤでは同じ型式が採用されず、型式2の架構、つまり、棟木を挟んで前後に2本の柱が立ち、それらの上部を胴差で連結し、その中央に合掌を支持する束を立てる(図4・左)。カミヤ、シモヤとも入母屋の屋根がかかり、棟の方向は互いに直交するように、つまり、カミヤを平入りに、シモヤを妻入りに建てる。台所や食事など日常的生活空間となるシモヤにおいては、中央に柱の立つ架構は好まれなかったことは注目すべきことである

う。また、10 例中 5 例はシモヤの架構において中央間とその左右間の差は 100mm～200mm、4 例は 400mm～700mm 程度である。中央の柱間を左右間の二倍程度にとる例さえあった²²。このように、先祖を祀るカミヤは格式ある建物として伝統的な形式が維持されることが求められる一方、日常の生活空間となるシモヤは、利便性など新奇な形式を取り入れやすかったと想像される（図 4・右）。

5. 架構型式 2 の建築技法的な特徴

棟木を挟んでその前後に柱の立つ型式 2 の架構が中部から南部にかけての諸地域に一般的に用いられていたことは、これまでの調査結果が如実に示している。家屋中央の柱間上部を繋いでいる胴差の上側に注目すると、その中央に束を立てるものと束を立てないものとに二分することができ、さらに後者には胴差の上に厚い板材が張られる場合がある（図 5）。

5.1 束立ちの事例にみる合掌部の納まり

まず、胴差の中央に束が立つ事例について検討してみよう。合掌部における束や斜梁などの納まりに着目して整理すると、表 3 の左側 3 列に示すように大別することができる。

〈1〉束が斜梁交差部まで達し、束の上端部に三角形の双翼を落とし込み、その上に斜梁が載るもの

〈2〉束の上端部に落とし込まれた左右の斜梁が、そこで合掌を形成するもの

〈3〉束が斜梁交差部まで到達せず、束の頂部で横材を介して左右の斜梁を繋ぐもの

フエ省でみられた束立ち 54 例中 47 例が上述の納まり〈3〉に属している。なお、フエ省で束の立つ例の大半は、聞き取りの結果、もともと祠堂として建設されたものであった（54 例中 50 例）。また、クアンナム省でみられる束立ち 124 例は、すべて納まり〈1〉であり、クアンガイ省では 125 例中 102 例が〈1〉、23 例が〈3〉の納まりとなっていた。南部 2 省でみられる束立ちのものは、〈1〉〈2〉〈3〉のいずれかの納まりで処理されている。そのなかでも、事例数からみると納まり〈1〉が最も一般的であったといえる。こうした架構を組み上げていく場合、〈1〉の納まりでは柱に胴差を組んだ後、束を立て、その頂部に双翼を落とし込み、その上に左右の斜梁を組むことになる。一方、〈3〉の納まりでは束が斜梁まで到達していないため、斜梁を先に組んでから、後から束と横材を挿入することができる。このように、納まり〈1〉において束は欠かせない部材であるのに対して、納まり〈3〉では束は付加的な部材として扱われている。言い換えると、〈1〉における束は合掌を支持する構造的な役割を果たしているのに対して、〈3〉の束には構造的な役割はなく、一種の「飾り」にすぎない。さらに先に述べたように、フエ省で納まり〈3〉を用いる例はそのほとんどがもと祠堂であったことや、同じ納まりがフエ王宮内にたつ建物にもみられることは注目に値しよう²³。納まり〈3〉を用いた場合、中央柱間に束が立つことは構造的なことより装飾的、象徴的な意味合いがあったと考えられる。クアンナム省やクアンガイ省でみられた束は、納まり〈1〉を用いるものが多いことはさきほど述べたが、それらの斗・束・双

図5：型式 2 の類型

表 3：型式 2 における合掌の納まり

型式 2 の合掌部	(1) 内は箱の場合				
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
TTH	7	-	47	54	326 (202)
QN	124	-	-	84	80 (1)
QNg	102	-	23	103	9
DN	115	19	44	-	-
TG	140	11	4	-	-

表 4：合掌部の納まりと斜梁型式の相関

合掌 斜梁
	(4)			(5)		
調査地	TTH	QN	QNg	TTH	QN	QNg
6	34	78	40(30)	26(1)	8
48	50	25	286(172)	54	1

翼などにはその表面に手を込んだ豊かな彫刻が施されるものも多く、かなり装飾的印象をうける。構造的な役割をもった束を使いながら、それを彫刻などで装飾化しようとしている。また、納まり〈2〉は一次調査において南部にしかみられない。カミヤとシモヤがともに現存する第二次調査の事例をみると、カミヤには納まり〈1〉、シモヤには納まり〈2〉を用いる場合がある。また、南部 2 省の民家の空間構成をみると、先祖壇が 2 本の正柱列の間に置かれ、ある意味、最も精神的に重要な空間の上方に束が立てられたと考えられる。なお、同様な先祖壇の配置と空間構成はフエ省でも少数例みられる。南部 2 省の例では、家屋の規模が中部のものより大きく高くなっているにもかかわらず、胴差の位置はむしろ柱のより上方に位置する傾向がみられ、束はさらに短くなり、実用性が薄れていることが見てとれる。

5.2 板張りの事例にみる「床」「箱」

つぎに、合掌部において束を立てない事例について、表 3 の右側 2 列のようにわけることができる。

〈4〉2 本の柱上方を繋ぐ胴差と斜梁によって、中央柱間の上部に山形五角形の骨組みが形成されるもの

〈5〉同様の骨組みが形成され、胴差の上に厚さ 20mm 程度の板材が張られているもの。ちなみに、前述の束が立つもので胴差の上にこうした厚板が張られる例はみられない²⁴。

これら〈4〉〈5〉のような合掌部の納まりは、南部の 2 省ではこれまで 1 例も報告されていない。フエ省では束を立てず、胴差の上に厚板を張る〈5〉の例が圧倒的に多いことがわかる。クアンナム省、クアンガイ省と南に行くほど、その比率は下がり、ついには、

南部のドンナイ省・ティエンザン省ではみられなくなるのである。これら板張りがフエ省を中心に限定的にあることは極めて興味深い。それらのなかには、前後の柱位置で胴差より上の部分を横羽目の板で塞ぎ、家屋中央部に断面が山形五角形をした、まるで閉鎖的な「箱」のように区画されるものがある。その大半は、これまでの調査によれば、フエ省に限定的にみられる（202例、表3）。クアンナム省でもわずか1例であるが、このような箱状の例をみることができた。聞き取りによると、この板張り部分は日常使わないものを置く場所であり、洪水の際の一時的な避難の場所となると言う²⁵。また、フエ省での調査において、主屋脇にあって、台所や倉庫となるヨコヤ Nhà ngang 内に、地上1mあまりに高床を張り、横羽目の板壁で囲われた造り付けの穀物倉庫がみられ、主屋の中央上部、棟近くに設けられた「箱」状の空間との深い関連が考えられる²⁶。

中部から南部における民家では、水平な梁はほとんど用いず、屋根根に沿って斜梁が柱間1間ごとに架かるか、棟から1本の長い部材で掛け渡すかのいずれかである。これら二つの斜梁形状と、表3で示した合掌部の納まり〈4〉〈5〉との相関を各省ごとにみたものが表4である。フエ省とクアンナム省では1本の長い斜梁が用いられることが多く、クアンガイ省では逆に柱間ごとに架ける斜梁が使われる傾向が読み取れるが、合掌部における2種の納まりとの強い相関関係はみられない。ただ、フエ省において板張りの326例中286例で、柱間2間分架かる長い斜梁が用いられていることは注目されよう。まるで太い垂木のような斜梁は、上述の「床」あるいは「箱」のような板張りとは何らかの関連を示すものかもしれない。

6. まとめ

以上のように、ベトナムの中部から南部にかけての五つの省で実施した民家調査の成果を踏まえ、そこにみられる木造架構について、

その言語的な意味をたどったうえで、合掌部の納まりなど建築技法的な特徴を整理してきた。これまでの考察結果は以下のように要約することができる。

(1) 棟木を支承する柱を用いる架構型式（型式1）を表わす *roi* や *nọc ngựa* という語彙は、おそらくこれらの語が示す架構とともに、越族がこれらの地域に南下する以前から現在のベトナムの中部から南部にかけての地域で使われていた土着のものが受け継がれたものであろうと想像される。「棟持ちの柱」が掘立て柱を起源とすることは広く信じられていることであるが、上述のように考えることはこの説を補強するものとなる。

(2) 型式1の合掌部における納まりから判断すると、柱の頂部に短い円形の横木を置き、その上で前後の斜梁を組むものが、精巧な切り込みや仕口をもたない最も初歩的な形を継承する手法であると思われる。それが次第に、斜梁交差部まで達しない柱はその頂部を欠き込んで、三角形をした部材を落とし込み、さらにそこに斜梁交差部自体を落とし込むようになる。柱の頂部を欠き込み、梁などを輪薙ぎ込む手法は、北部の民家などでもみられるベトナムの木造建築を最も特徴づけることで、そうした技法が次第に中部から南部に伝わったことを裏付けていると考えられる。こうした技法が南部に広がると同時に、家屋は次第に大規模化したのである。

(3) 南部の民家では、型式1の架構は格式の高い主屋カミヤにおいて継承されるが、それと軒を接して並び、日常的な生活の場となるシモヤでは実用性などから次第に束に代えることによって中央の柱を省くようになる。

(4) 2本の柱を胴差で繋ぎ、その上で合掌を組む架構型式（型式2）を表わす *rường*、*rường*、*trính* という語彙は、少なくとも17世紀中頃には使われていたもので、*rường* と *rường* はともに中国の漢字を取り入れた喃字であり、*trính* は南部地域でかつて使われていた安

図6：中部と南部における架構型式の系統とその展開

南語に由来する。いずれもすでに土着にあった架構を南下してきた越族が積極的に取り入れた技法・様式であったと推測される。

(5) 型式2のうち、とくに束のたつ手法は、前述のシモヤにおける実用性とはまったく異なる理由により、土着にあった型式1から変化発展してきたのではないかと想像している。原則的に型式1とほぼ同様、束の頂部を欠き込んで斜梁の交差点まで落とし込むようになり、さらには合掌に組んだ斜梁の下から差し入れる装飾的な束に変化していくと想定している。このように実用性の薄れた束は、建物の中央にたつことにその存在の意味がおかれ、王宮の建物や先祖を祀る祠堂などで、象徴性を際立たせるための装置となっていくとともに、とくに南部においては型式1と同様、家屋自体は大規模化していく。

(6) Pierre Gourou がフエより北の地域の民家として報告した *rường* という語彙は「箱」を意味し、型式2のうち、とくにフエ省の民家にみられる床もしくは箱状の厚板張りのものとの密接な関連が指摘できよう。さらに言えば、東南アジア、南シナ海・東シナ海などに広くみることができる高床の板倉との関連を連想される。

以上のような内容を図解したものが図6である。

参考文献

- (1) Alexandre De Rhodes: *Dictionarium Annamiticum Lusitanum et Latinum*, Romae Typis & sumptibus eipfem Sacri, Congreg., 1651
- (2) Vương Hồng Sển: *Tự vị tiếng việt miền nam*, NXB Văn hoá, 1993
- (3) Võ Xuân Trang: *Phương Ngữ Bình Trị Thiên*, NXB Khoa học Xã Hội, 1997
- (4) Vũ Văn Kính: *Đại từ điển chữ nôm*, NXB Văn nghệ TPHCM & Trung tâm nghiên cứu Quốc Học, 2002
- (5) Viện ngôn ngữ học: *Từ điển tiếng việt*, NXB Đà Nẵng & Trung tâm từ điển học, 1998
- (6) Pierre Gourou: *Esquisse d'une étude de l'habitation Annamite-Dans l'Annam septentrional et Central du Thanh Hoa au Binh Dinh*, Paris, 1936
- (7) Louis Bezacier: *L'art Vietnamien*, Paris, 1954
- (8) Nguyễn Khắc Tụng: *Traditional Dwelling-Houses of VietNameese ethnic Groups*, Hội khoa học lịch sử Việt Nam, 1994
- (9) 昭和女子大学国際文化研究所紀要: ベトナム伝統的住居の保存と再生, Vol.5, 1999
- (10) 昭和女子大学国際文化研究所紀要: ベトナム伝統住居の体系的研究—所在調査と意匠技術の編年, Vol.7, 2001
- (11) 若林弘子: 高床式建物の源流, 弘文堂, 1986, 7
- (12) 土本俊和: 中近世都市形態史論, 中央公論美術出版, 2003, 2
- (13) 浅川滋男: 住まいの民族建築学, 建築資料研究社, 1994, 6

注

1 ベトナム全国を対象とした伝統的民家の実態調査は、平成9～10年度文部省科学研究補助金・国際学術研究「ベトナム伝統住居の保存と再生に関する研究」(代表: 平井 聖)、同平成11～13年度「ベトナム伝統的住居の体系的研究—所在調査と意匠技法の編年」(代表: 友田博通)、同平成14年度日本私立学校振興・学術研究振興資金「ベトナム伝統住居の体系的研究—文化財保存の国際協力」(代表: 友田博通)のもとで実施された。

ベトナム北部における伝統的木造民家の架構型式や空間構成にみられる建築史的特徴などについては、すでに別の拙稿において論じた。「ベトナム北部・バクニン省及びナムディン省の伝統的民家架構形式に関する研究」日本建築学会計画系論文集 第550号 pp.267～273 2001年12月。「ベトナム北部4省の伝統的民家主屋における空間構成」日本建築学会計画系論文集 第579号 pp.135～140 2004年05月。

2 ベトナム民家を初めて研究したことで知られるフランス人 Pierre Gourou (文献6) はフランスの保護地域の北部トンキンと中部安南(タインホアからビンチンまで)を区別して論じ、また、アメリカとの戦争後において伝統的民家を研究した先人的存在である Nguyễn Khắc Tụng (文献8) は北部・中部・南部にそれぞれ歴史上の地理的・行政的な区分したうえで民家を紹介している。Nguyễn Khắc Tụng の研究とその以降のベトナム研究者とも、Pierre Gourou の研究から影響を多く受けたものである。

3 当該の民家調査は、1998年度にフエ省とドンナイ省、2000年度にクアンガイ省とティエンザン省、さらに2001年度にはクアンナム省でそれぞれ実施された。ベトナム側による調査は、各省の文化情報省保存博物館局の協力のもと、建設省建築研究所、フエ大学建築学科、ホーチミン建築大学が中核となって実施された。通常、3次にわたる調査を実施し、第一次調査はおもにベトナム側チームが中心に、第二次調査は一部に日本側チームが加わる形で行われ、さらに第三次では日本側が独自に調査を実施した。

4 調査が実施された中部・南部の省の民家については、以下のような個別の報告がなされている。

吉田直子他「ベトナム・フエ省伝統的民家の平面と架構について」日本建築学会大会学術講演梗概集 F2 pp.181-182 1999年。峯田龍太郎他「ベトナム・ドンナイ省伝統的民家の平面と架構について」日本建築学会大会学術講演梗概

集 F2 pp.183-184 1999年。チャンティクエハー他「ベトナム・ティエンザン省の伝統的民家の調査研究(1)～(2)」日本建築学会大会学術講演梗概集 F2 pp.181-184 2001年。高野恵子他「ベトナム・クアンガイ省伝統的民家の平面と架構について」日本建築学会大会学術講演梗概集 F2 pp.184-185 2001年。チャンティクエハー・山田幸正「ベトナム・ティエンザン省の伝統的民家に関する研究(1)～(2)」2001年度日本建築学会関東支部研究報告集 pp.541-548。中澤寛美他「クアンナム省 DienBan 県 DienPhuong 社の伝統的民家の平面構成について(5)」日本建築学会大会学術講演梗概集 F2 pp.197-198 2003年。吉田直子・山田幸正「トゥアティエン・フエ省の伝統的民家」『昭和女子大学国際文化研究所紀要』Vol.5 pp.22-37 1999年。峯田龍太郎・山田幸正「ドンナイ省の伝統的民家」『昭和女子大学国際文化研究所紀要』Vol.5 pp.38-44 1999年。重枝豊・中澤寛美「クアンナム省の民家」『昭和女子大学国際文化研究所紀要』Vol.7 pp.83-104 2001年。高野恵子「クアンガイ省の民家」『昭和女子大学国際文化研究所紀要』Vol.7 pp.105-125 2001年。チャンティクエハー・山田幸正「ティエンザン省の民家」『昭和女子大学国際文化研究所紀要』Vol.7 pp.127-143 2001年。

5 一次調査において、洋風ファサードで天井をはる例、道に面する町屋風の例、トラス架構を用いた例あわせて143件は対象外とした。

6 吉田直子他「トゥアティエン・フエ省の伝統的民家」において、「nhà rường」は長方形、「nhà rọi」は正方形の平面を持つものとされている。しかし、筆者らはこれとは別の見解をとる。

7 Pierre・Gourou の研究(文献6)や Nguyễn Khắc Tụng の研究(文献8)のほかにも Chu Quang Trứ: 「Kiến trúc dân gian truyền thống Việt Nam」NXB Mỹ thuật 1996 p.38 などでも同様な呼称がみられる。

なお、聞き取り調査の対象となったのは、フエ省で59件、クアンナム省で23件、クアンガイ省で3件、ドンナイ省で23件、ティエンザン省で10件、である。

8 文献(6) pp.44-56

9 文献(5) p.802

10 文献(1) p.834

11 文献(4) p.1187

12 文献(5) p.811

13 文献(1) p.662

14 文献(4) p.1187

15 文献(5) p.811

16 クアンガイ省における第一次調査では、型式1の事例はみられなかった。なお、一次調査の写真によって合掌部の納まりを確認できないものは、フエ省で11例中1件、ドンナイ省で180例中18例、ティエンザン省で168例中13例。

17 文献(9)(10)を参照。また、フエ省の第一次調査で報告されている型式1の11例は、すべて間口3間の家屋で、茅葺きの例も含まれている。クアンナム省で実測された型式1の2例はとも間口5間であるが、その奥行方向の規模は南部の民家に比べ、その半分程度しかない(2例の平均値で、間口12.127m×奥行6.029m)。さらに、棟の直下にたつ柱もその高さが3.700mほどしかなく、南部民家の平均値5.149mと比べると、かなり低い棟高であることがわかる。

18 残り185例のうち168例は不明で、斜梁が1間分の柱間を連結していることが確認できたのは17例のみである。

19 表2のうち右端の⑥に示す手法(棟下にたつ中柱は合掌よりやや下の位置で留まり、短い横材を介して斜梁と連結する)は、本稿の考察対象とした中部・南部5省では見られなかったが、Pierre Gourou (文献6)が指摘したもので、これを含めて表記した。なお、これまでの調査の中では、北部のなかでも最も南に位置するグアン省でこの手法が報告されている。

20 語彙の意味としては「木の葉」を表す。なお、南部2省では同様な部材を Cánh dơi あるいは ập quả という名称で呼ぶが、その意味はそれぞれ「蝙蝠の羽」と「果物のへた」で、いずれも三角形をした部材をイメージとして名づけられたと思われる。

21 Nhà trên 「カミヤ」、Nhà dưới 「シモヤ」。直訳すると前者は「上の家」、後者は「下の家」となる。文献(9)(10)を参照

22 ドンナイ省 Biên Hoà 県 Thống Nhất 村 Võ Văn Danh 宅。中央間は3,700mm、左右間はそれぞれ1,650mmと1,450mmである。

23 フエに建設された阮朝の宮殿は、規模を別にすれば、建築技法の点では民家とさほど変らない。これら宮殿建築には、中央柱間の胴差上に束が立つ例が多くみられる(例えば: Diên Thọ 宮, Triệu Miếu, Sùng An 宮, Triệu Tô Miếu, Càn Chánh 殿など)。

24 筆者らのフエ省での調査(第3次調査)で、束を立て胴差の下面に天井のような薄い板を張るものがごく少数例みられた(ベトナム側による第一次調査にはそうした例は含まれていない)。この板の役割についてはよくわからないが、当然、こうした薄板ではその上に物を収納するための倉庫や洪水の避難場所とすることはできず、胴差上面に張られた厚板とはその目的は異なっていると思われる。

25 洪水時に使う木製の小舟を置いていたという聞き取りがある。

26 フエ省 Hương Thủy 県 Thủy Phú 村 Ngô Thi Châu 宅のヨコヤ。中央に柱4本を立て、土間面から1mあまりの高さに横架材を渡し、その上面に床板を張り、横羽目板壁で囲われ、妻側に扉口が設けられる。

(2004年6月10日原稿受理, 2004年8月12日採用決定)